

# 生活環境としての「博物館」の現状と課題

福岡県教育庁指導第二部文化課九州国立博物館誘致促進対策室 石山 勲

## I はじめに

たとえば木曜日の夜、グラスを片手に夕刊をひろげると、スポーツ・音楽・舞台・映画・展覧会他、多種多彩なイベント情報がガイド『欄』をとりこして『面』、それも見開きの2面に満載されているのが目に入る。「ふむふむ」と肯きながら、週末から翌週にかけての計画をたてようとする市民の求めに対応した紙面構成だ、といえよう。

学校や道路他を優先させてきた公共的建築物の建設が一段落したせいもあって、ホールや図書館・資料館・美術館他の文化施設の充実に関心と予算とが向けられる時代に漸くたどり着き、行政や企業からの発言に、何かと「文化」の二文字が目立ち、昨今では、時代の流れは「文化」にとって頼もししい追い風となっている、かに見える。

冒頭から私事にわたって恐縮ではあるが、筆者の現在の所属は、博物館そのものではない。けれども、かつて、九州歴史資料館（県立、太宰府市）の分館の一つである甘木歴史資料館（県立）に昭和60年の開館から僅か3年間に過ぎないものの勤務したことがあり、昭和63年度からは、九州の各界が一体となって展開している「九州国立博物館」誘致運動の事務局の一員を努めている。

参考までに御紹介しておくと、この「九州国立博物館」は、当然建設地の見当はつくも

のの、その中味が見えにくい嫌いがある。そこで、「九州の太宰府」に誘致しようとしている「九州国立博物館」は、「アジア諸地域をめぐる国際的相互理解を推進し、文明交流を深める」拠点となることを目指しているとの意味をこめて、その名称を「国立アジア文明博物館（仮称）」としたらいかがかと、九州では国に対して提案している。

それはともかくとして、筆者は、「博物館」の類は、生活環境の一部と考えるべきで、自然環境と同様に我々の生活にとって「あった方が良いもの」ではなくて「なくてはならないもの」となりつつあるとの認識を、ここ数年来強く持つに至っている。

「博物館」の類は、次に述べるように設立の経緯や対象とする分野が実に多様であるので、十把一絡げに論ずることなど到底できない相談である。だから、執筆のお誘いがあった時、一瞬ためらったものの、「環境」なる文言に惹かれて、柄ではないことを承知しつつ敢えてお引き受けした次第である。

なお、筆者は、限られた経験ではあるものの、それらを通じて、誤解を恐れずに敢えて言えば、「博物館」の類の業務はサービス業に分類できる、と認識している。ここでは、こうした認識にたって、現状と課題を中心に、「博物館」について折々に考えたり感じたりしてきた事柄を御紹介するが、小稿が「博物

館」に対する読者の関心と理解を深めていた  
だくための一助ともなれば幸いである。

## II 「博物館」の現状

### 「博物館」の役割は、3本柱

一言で表わすならば、「博物館」は、「歴史、  
芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料」  
（「博物館法」第2条）について、①収集・保管し、  
②展示、普及を行い、③調査・研究する  
機関・施設、ということになる。

ともすれば表舞台ともいえる展示に目を奪  
われがちであるが、バック・アップ機能は當  
然必要であり、以上の3本柱のバランスのと  
れた充実・整備を本来的に欠かすわけにはい  
かない。

### 水族館も「博物館」——「博物館」の種類 と数

「博物館」は、対象とする分野が人文・社会系から自然系までと間口が大変に広い。日本博物館協会編の『全国博物館総覧』では、総合博物館、郷土博物館、美術館、歴史博物館、自然史博物館、理工博物館、動物園、水族館、植物園と、計9種に分類されている。

つまり、某水族館がたとえ○○博物館との  
看板を掲げてはいなくとも、「博物館」の概念  
に納まることになる（ただし、「博物館法」で  
いう「博物館」となるには、登録を受けるこ  
とが必要）。

一方、設置者による区分では、国立、公立、  
私立に三大別できる。国立の博物館のうち、  
東京・京都・奈良の三館は文化庁の所管であ  
るのに対して、民族学博物館（大阪府）と歴  
史民俗博物館（千葉県）の二館は文部省学術  
国際局所管の大学共同利用機関、科学博物館

（東京都）は同省生涯学習局所管となってお

り、設置の経緯と目的とを自ずと物語ってい  
る。

ともあれ、水族館をも含めたいわゆる「博物  
館」の類は、日本博物館協会に拠れば、1992  
年3月現在で、全国で約2900館にも達してい  
るという（約4500館とする推計もある）。国立  
歴史民俗博物館のように、人員103名、予算29  
億円以上（平成4年度）の超大型館から、既  
存施設の一室を間借りした程度の郷土資料室  
まで、「博物館」は、規模においても千差万別  
である。因に、福岡県下における「博物館」  
は、規模こそちがえ百館・室を数え、97市町  
村中の約4割に美術館・博物館・資料館等が  
設置されている。

なお、小稿で扱う「博物館」は、筆者の力  
量の関係上、甚だ勝手で恐縮しているが、前  
述の9タイプのうち郷土博物館や歴史博物館  
(これらは、公立の場合は、最近の傾向とし  
ては、○○歴史資料館とか、△△歴史民俗資  
料館と命名されることが多い)を主として念  
頭においていることを、予め、お断わりして  
おきたい。

### いわゆる「博物館行き」なる語

無論、この場合は、役に立たなくなったモノ、時代遅れのモノの代名詞として使用され  
ている語のことである。「温故知新」という故  
事もあるものの、新しいモノの方がより便利  
で進んでいる、という見方は相変わらず根強く、  
全体としては、「博物館」に対するイメージは  
余り前向きではないようだ。

だから、「博物館」のイメージといえば、用  
済みのガラクタの類が並べてあり、カビ臭く  
て暗い雰囲気が漂っている、ということにな  
りがちだ。

おかげに、美術館の場合は、芸術作品を鑑

賞する、というよりも、それとのふれ合いを楽しむといった一種の気楽さ——頭ではなくハートで感ずることも可能だが、「博物館」の場合では、展示されている資料を学び理解する——勉強する場所というイメージが先行しがちで、何とも分が悪い。

ハコ（建物）を作つて、ヒト（専従職員）を入れず

「博物館法」に基づいて「博物館登録原簿」への登録を受けようとする場合、「博物館に、専門的職員として学芸員を置く」ことが求め満たすべき要件の一つとなっている。無論、登録を受けなくとも、○○博物館とか△△美術館と名のること自体は、一向に差し支えがないが。

けれども、前述したように、「博物館」が果たすべき三つの機能からみて、学術分野を担当する学芸員や、管理・運営のための要員の確保等、適正な人員の配置が必要となる。

ところが、実態としては、学芸員はおろか施錠・解錠他を担当する専従の管理要員すら配置されていない館が、案外に多い。福岡県下を例に取ると、学芸員あるいは専門分野の担当者（含嘱託）がまがりなりにも配置されているのは全体の約四割に過ぎず、複数配置館に至っては二割強にとどまっている。

しかも、初めにハコありきとばかり公立の場合は、財政規模や近隣市町村との均衡に対する配慮がとくに優先しがちのようだ。内外観ともに立派な施設が完成しても、調査・研究やストックのためのスペースが付け足し程度にしか充てられていない場合も、間間見受けられる。開館すること自体にも無論意味はあるものの、活動するためのハコとヒトの充実——基盤整備が充分ではない施設はやは

り問題だ。

ヒトのいない「博物館」は実に寂しい

立派な外観の建物の中でいかに工夫を凝らした展示が行われていても、<sup>ヒトケ</sup>人気がない——お客様が少ないと実に寒々とするものだし、時には無気味でさえある。入館してから外へ出るまで、他のお客様と全くスレ違わなかったことを体験された方もおられるはずだ。邪魔されずにマイペースで楽しめる、とは限らず、つい足早になってしまふ時もある。勤務する側でも、同じような思いをもち、実際に辛い。

筆者の知る限りでは、入館者が多過ぎて嬉しい悲鳴をあげている、といった景気の良い「博物館」は残念ながらないようだ。新設館には観客が集まるものの、翌年か翌々年には入館者数が早くも半減する例が、意外に多い。

何故か。筆者の感じでは、「博物館」へは一回行けばよく、何度も行くところではない、どうせ同じモノが並んでいるのだから、というみかたが、案外手強い。これは、半分当たっており、半分は誤解である。

通常、「博物館」での展示は、常設展示と企画展示とに分けられる。前者は、各館の基本姿勢を具体的に示すもので、総論——憲法に相当する。だから、みだりに内容を変える必要と理由はもともとない。その意味で、変わり映えがしない、という指摘を受けても当然至極だ。そこで、テーマに沿って一層掘り下げた内容を盛りこんだ各論にあたる企画展を織りこむことによって、市民の幅広い関心に応えていく、と工夫が凝らされる。

常設展は無論、企画展もまさに学芸員の腕の見せ所だといえるが、肝心な学芸員そのものが配置されていなかったり、企画展用のス

ペースがもともと確保されていない、といった施設では、展示内容が変わるべくもない。

ただし、常設展であってもまるっきり同じではない、と敢えて強弁しておきたい。例えば、遺跡の発掘調査によって得られる出土品——考古資料については、洗浄・接合・計測・撮影他一連の整理作業が済んだ分を速報的に紹介したり、従来展示されていた同種の資料との入れ替えは不斷に行われているからである。もっとも、こうした変化は、専門家とか足繁く通いつめている方々には、「あっ、変わってる」と判っていただけるものの、一般の方々にそれを望むのは無理なこと、と承知している。

ヒトが多く集まれば、企画自体も良し企画展が成功か否かは、誤解を恐れずに敢えていえば、入館者数——観客数で評価されるというのがこの業界の習わしである。無茶な話ではあるが、観客は多かったが中味は今一だったと真剣に悩む人は、そう多くはないはずだ。自己満足のためではなく、さらに、周辺の多くの方々との連携プレーで、相当の準備と周到な配慮とで企画展を開催するからには、多くの方々に見ていただけなければ、開催する意味は半減してしまう。

だから、関係者にとっての入館者数は、実に気になるものであり、かつ、独歩きもする魔物のごとき存在、といえる。修学旅行や観光コースに組みこまれている館はまだ良いが、年間入館者数が1万人前後の館では（残念ながら大多数の「博物館」が該当する）、1日当たりでは40～50人、つまり、大型バス1台分が平均入館者数にはほぼ匹敵する。バスが寄るか否か、その差は大きい。バスよ来い、願いは切実である。

信じていただけないかもしれないが、入館者が零の日もあり、そんな日は、まさに地獄である。筆者も、数回経験した。年末から翌年2月末まで、それも寒くて雨か雪の日にはハラハラしたものだ。そうしたある日、3時を過ぎても……、4時になって玄関のガラス戸が漸く左右に開いた。やれやれ零を免れたかとホッとしたのも束の間、お客様の姿が見えない。なんと、センサーが近づいてきた犬をキャッチし自動扉が作動したというのが事の顛末。まさか、と、ついに、との思いが交錯し、絶句した。お客様が少ない日は、随分と職員は辛く、いたたまれない。

### III この頃の「博物館」（課題にかえて）

#### 後発館の悩み

ところで、日進月歩の世の中であるので、後で作られた施設ほど、同種の施設に比べるとより充実したものになるというのが通例だ。しかし、「博物館」の場合は、必ずしもそうとは限らないのが、特色であり、悩みとなっている。一言でいえば、実物資料あるいは作品の収集・入手がより困難となりがちで、これがまさに後発館の隘路である。

本来は、収集した資料・作品が先ずあり、次に、それに相応しい保管を行うために必要にして充分な施設（ハコ）が設計・施工されるべきであるが、最近では、ハコと中味（資料・作品）とがアンバランスという悲喜劇が時折、展開されている。

理由は、大きくは二つある。その1は、一般的により価値が高いとみられる資料・作品は限られており（有限）、再生産は当然不可能で、しかも、既に、様々な経緯を経て然るべき施設他に各々が一応落ち着いているからで

ある。つまり、一定の秩序が出来あがっている。

その2は、資料・作品の現地主義の定着にある。かつては、これら、特に考古資料は、調査・買上・寄託他を契機として旧帝大や旧帝室博物館に集中して収集・保管される傾向が顕著であった。けれども、昨今では、考古資料は、適切な保管施設があれば原則として現地（県市町村）保存し、あるいは、わざわざ資料館を新設するなどして、流出を避けることがほぼ定着している。このため、市町村立の施設はまだしも、県立クラスの後発館の収集・入手活動には、ひと頃には考えられなかつた悩みと苦労がつきまとっている。

注意を要するのは、後発館の関係者が洩らしがちな、「○○大学（△△博物館）に預けている（寄託）、××資料を里帰りさせられないか」といった類の発言である。資料・作品の現地主義という建前からは一応もっともに聞こえるが、寄託の経緯を配慮していない発言であるケースが大多数を占める。寄託された時期は、今日程には歴史的遺産に対する関心が高くはなかった戦前が多い。だから、半世紀以上もの間、○○大学（△△博物館）できちんと保管されていたからこそ今に伝えられている、という面を充分に留意する必要があることを、この際に、敢えて、強調しておきたい。

調査・研究が進めば、資料・情報も自ずと集まる。

以上のハンディを負う後発館は、先発館に伍して活動し、その存在をアピールしていくためにも、筆者は、調査・研究活動の充実を図るべきだ、と考えている。

自然系、人文・社会系を問わず、各種の野

外・現地調査——フィールド・ワークを手段とする学問は多く、これらが活発化すれば当然、得られる資料や情報（写真・図面・テープ他）は、年々確実に蓄積されていく。宝の山を自ら築きあげていくことになる。地質学や考古学・民俗学は、こうした典型的な例だ。

研究が活発に行われて一定の成果が公表されたり、資料・情報が整理（保存処理を含む）・公開されること、資料の解説や閲覧、保存処理依頼、情報交換他、様々な目的で、資料・情報を携えた人々が集まってきて、輪が一層広がることになる。後発館に限ったことではないが、後発館ほど意を注ぐべき分野と考える所以である。

#### スペシャリストを目指す

企業系の「博物館」は、本来的に特定分野を扱う専門館が多いようだ。最近の公民館の提言でも、類似を避けるために、様々な工夫をしているが、熊本県立装飾古墳館（平成4年開館）はその代表例の一つで、名称にもその意気込みが端的に表れている。一方、名称は求菩提資料館（県立、豊前市、九州歴史資料館の分館の一つ）となっているが、同館は修驗道専門館として古く昭和49年に開館している。平成5年5月に開館したばかりの土井ヶ浜遺伝人類学ミュージアム（山口県）も、専門館としての到達点の一つ。

#### ミュージアム・ショップ、ロビー・コンサート

上野の国立科学博物館地下のミュージアムショップは、楽しい。値段も手頃で、将来の有権者・納税者でもある小学生達が群がっている。東京国立博物館の本館地下も面目を一新し、他館の図録類も置いてあり便利だ。ただし、児童・生徒の姿は、まず見かけない。福岡市博物館のレストランは、素人っぽさ？が

雰囲気に妙にマッチしており、同館の人気スポットの一つ。

山口県立美術館の中庭にはピアノが置かれているし、福岡市博物館では、企画展示の一環としてコシノジュンコのファッショ・ショウが開催されて耳目を集め、アンティク・オルゴールの演奏も好評を博していた。

このように、「博物館」側では、単に展示を見ていただけではなく、寛いだ時間を過ごせるようにと様々な仕掛けを用意している。無論、パフォーマンスの他にも、図書室もあるし、ビデオを含めた各種の情報の提供、公開講座の開催等、お客様の幅広い関心・興味に対するサービスの充実に努めている。

以上は、例外的存在である大規模館のケースであるが、小規模館でも、学芸員がまさに奮闘している。各々の地域の特性を、川や峠、時には海をなかだちとして周辺地域と不斷に行われた交流の実態を、様々なテーマの企画展で紹介している。こうした企画展は、先人達の直・間接の交流範囲が意外な広がりをもつことや、周辺あるいは遠隔地との見えない糸つながりを実感できる、と好評を得ている。

しかも、こうした展示が契機となって、「うちにはもっと立派なモノがありますよ」とか、「処分するところだったので丁度良かった」という具合に、お客様から「資料」提供の申出を受けることもある。このように、企画展は、館と地域の人々とを結ぶ大切な環だ、と筆者は考えている。

#### IV おわりに

人間が社会的動物である以上、「博物館」も、否応なしにとりまく社会の状況とその変化か

らの影響を受けることになる。「博物館」は、これから時代にどう順応するのか、単なる陳列施設を脱皮するだけではなく、活動の方向を自ら見定める必要に迫られている、といえよう。

活動の方向としては、大きくは以下の二点を考えて良いのではなかろうか。

その一つは、地域の文化活動の拠点の一つとしてである。とりまく状況としては、一方では、「ムラおこし」の名のもとに地域の活性化に躍起、という状況がある。その大多数は経済的波及効果を狙っており、イベント指向で目新しさを追求する例が目立つが、永続化している例は極めて少ない。その地域——風土のたたずまいと、その特性を活かした人々の日々の営みこそが、そこを訪れる人達を惹きつけるのだから、生半可な企画で事が足りるはずがない。

再生できない、あるいは、しにくいもの一環境を大切にするという伝統的生活スタイルと一定程度の便利さとのバランス、人々はそこに暮らすことに喜びを無意識のうちに感じている、といったあたりが、各々の土地に根ざした生活のあらまほしき姿ではあるまい。

他方では、サラリーマン化が進んだ結果、現在の地域社会の構成には大きな変化が生じている。つまり、地域社会によっては、もともとその土地で生業を営む人達よりも、サラリーマンあるいは退職者他の転入者の方（含家族）が人口比で圧倒している所が珍しくはなくなってきた。例えば、各々の土地には各々の祭りがあるが、神輿を担ぐ人よりも見物人がやたらと増えた、といった具合で、日々の生活と折々の祭りとが連動しないという人達が、確実に増えている。

こうした休日のみ（家におればの話だが）をそこで過ごす働き盛りの人々の人口比が高まる中で、地域文化なるものはこれからどう形成されていくのか、はたまた、地域社会は今後どうなっていくものか、壮大なる実験が今まさにくり広げられている、ともいえるのではないか。

だからこそ、自分達が暮らしている土地柄を、自信をもって説明できることが「ムラおこし」の第一歩ではないか、と考える。例えば、「王塚古墳のある桂川町です」とか。王塚古墳を知らない人には、「赤とか黒の馬の絵もあるんですよ」とか、説明して欲しい。特に、児童・生徒には、そうあって欲しい。捜しあぐねている時に、もしも、近所の子供達が目的の資料館や美術館まで連れて行ってくれたとしたら、貴方の彼の地に対する印象は一層好ましいものとなるはずだ。

将来の有権者・納税者ともなる子供達には、「博物館」での各々の想い出を是非もって欲しい。その想い出は、きっと、新しい文化の創造の源泉・原点となり得る、と考えるからだ。つまり、「博物館」は地域のヘソ（原点）であり、地域における文化活動の拠点の一つとしていかにも相応しい、ということができる。

活動の目指す方向のその二は、「生涯学習」時代の受け皿である。

「余生20年時代」の到来とかで、ヒトはパンのみにて生きるのではない以上、誰もがいすれば直面するのが、それをどう過ごすか、である。一線を退いたからには好きなことを存分にやりたい、という方達の学習意欲は、極めて高い。中には、身につけた知識・技能他を他の方のために役に立てたい、「博物館」

活動に係るボランティア活動をしたい、と希望されている方々もおられる。

こうした意欲と希望に対する「博物館」側の対応は、情報サービスについては、図書・映像や機器類は購入等により年々充実していくことは期待できるが、ガイダンス等の学習相談に面して応ずる人的体制は、まず組まれていないのが実状だ。希望者が多いガイド・ボランティアの養成にしても、然りである。「教育博物館」として明治10年に発足し、教育普及活動の先駆者である国立科学博物館では、長期におよぶガイド・ボランティア養成講座制を確立しているが、残念ながらこれは例外的存在である。

ボランティアを希望する方達は、役に立ちたい、喜んでもらえたら、という気持と、自身の啓発あるいは体調維持にもつながるとの判断をお持ちのようだ。つまり、他人のためだけではなく、自分のためにもなる、と。

だから、ボランティアの導入は人員不足解消の便法だと批判を受けないためにも、ボランティア養成のためのカリキュラムの設定と専従スタッフの配置が不可欠となる。課題は、軽くはないが、クリアすべき理由と意義は充分にある。

このように、「博物館」をとりまく社会的状況と目指すべき方向を考えると、「博物館」は、各々の地域の人達にとっての文化活動の拠点の一つとして、「なくとも良いが、あった方が良い」程度ではなく、「なくてはならないもの」「欠かせないもの」と評価できる。無論、設置者による役割分担は、自ずとあるが。

以上、思いつくままに書き連ねたが、目的を果たせたのか甚だ心許ない。

最後に、もう一度くり返しておきたい。曰

く、「博物館」のモットーはサービスにある,  
「博物館」は我々の生活環境の一部でもある,  
と。

文学修士

職歴：福岡県教育庁指導第二部文化課  
九州国立博物館誘致促進対策室  
参事補佐兼室長補佐

#### 著者略歴

氏名：Isao Ishiyama

学歴：早稲田大学大学院文学研究科  
芸術学修士課程修了

著書：共著『装飾古墳』〈日本の原始美術10〉,  
講談社, 1979年  
「鎮魂の芸術」『古墳時代の工芸』所収  
〈古代史復元 7〉, 講談社, 1990年



九州歴史資料館正面